遊びを通して子どもの育ちを考える(4)

「病院ごっこ」と「ゴム鉄砲」

阿部　康子

運動会では精一杯走った、宇宙旅行の身体表現をした。子ども祭りではおもちゃ屋さん、射的場、音楽会と思い思いに仲間で計画をして、小さいお友達を招待した。小さい人達が喜んでくれて、そのことが一番嬉しかった。小学校のお姉さんお兄さんに招待されて小学校へも行った。広い運動場や体育館にちょっぴり緊張しながらも面白かった！

そんな十月を過ごして、十一月は再び自分達の生活の中でどんぐり、やしゃぶしの実を集めてはご馳走を作る、そしてパーティーを開いて楽しい。りょうへいが始めたどんぐりごま作りが広がって、三十個、四十個とどんぐりごまが増えていき、小さい人達へのプレゼントを

思いつく、ということがあったり、たつま、こうき、ゆうき、たかゆき、こうすけは相変わらずゴム鉄砲作りに集まり、輪ゴムがより遠くへ飛ぶように、より大きく形のよいものを、とこだわり続けている。「せんせい、こんとこ持ってて」「色のついたゴム出して」「ねえ、見てて、よく飛ぶで」とそれぞれが工夫しながら競い合う姿があった。バドミントンに夢中のてつや、ゆうたは、三回位はリレーが出来るようになって嬉しい！　あすか、れみがゼリーカップに木の実を入れて「音がする」と、互いに音を出し合って面白がっているうちに、それを見たななこの発案で「音楽会をしよう」ということになった。以来、二週目に入っても、メンバーは替わりながら積み木のステージは賑わっている。自転車に乗って走り合うのも、縄跳びも、誰かが始めては広がって楽しい、そんな日常が繰り返されている。

十一月二十七日（火）　晴

今朝も子どもたちは登園すると、昨日の続きを始める人、面白いことはないかと探す人、「自転車へ行ってきます」と園庭を目指す人達で始まった。

さとこ、ななこが園庭を小走りで登園してくる。さとこの手元で大きな紙袋が揺れている。「おはよう、すごいパワーね。いいことあったのかな？」と迎える私に「これ！」と手にしていた紙袋を差し出した。「なにかな？」と受け取り袋の中を覗こうとすると、「看護婦さんの帽子」と笑いながら取り出した。そうか、昨日の降園間際に「明日病院ごっこやりたい」と言っていたのを思い出して、「いよいよ病院ごっこが始まるのですか」と受ける私に、「うん、まあね」と答えながらななこを見る。ななこはすでに登園しているあすか、れみのところでどんぐりマラカスを前におしゃべりをしている。さとこは私に目を移し、「どうやればいい？」と聞いてきた。「病院ごっこのこと？」

「うん」。私はさとこの中にある病院ごっこのイメージを

▲看護婦さんの帽子

探りながら「どんな病院をやりたいのかな?」と返す。「うーん、足が痛い人とか、熱を出した子どもが来るの」「そうか、じゃあ何がいるかな」。さとこは少し考えて「薬がいるよ」「うーん、薬ね、大事だもんね。どんなお薬作るのかな? いるものがあったら言ってね」。「うん」と答えてさとこはなこの方へ行った。

私は、ゴム鉄砲作りの人達に材料を揃えながら、さとこがこれほど熱心に「病院ごっこをやりたい」と言ってきたのは、九月の「三匹のやぎのがらがらどん」のお話ごっこ以来のことだ、と思った。どちらかといえば、友達に「○○やろう」と誘われれば「いいよ」と協力を惜しまず、楽しそうにアイディアを出したりしながら中心となって遊びを進めているが、さあお店を開こう、皆に見て貰おう、聞いて貰おう、という段になると「私はいい」と外側の人になってしまう姿が度々あり、気になっていたところである。さとこの病院ごっこを最後までさとこの手で達成させてやりたいと思いながら、今日は小学校五年生のお兄さん、お姉さんからの招待を受けていることから、「病院ごっこをやりたい」の準備は明日からということになった。

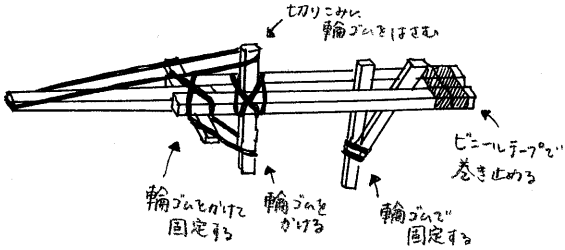
十一月二十八日（水）　晴

病院ごっこ　さとこは登園すると、空箱、木の実、紙類等の材料置き場の前で何かを探していたが、どんぐりを箱に幾らかいれてままごとコーナーへ持って行った。暫くするとみさと、ななこ、れみも入って行った。「何か始まったな」とやや時間をおいて覗きに行く。ままごとコーナーのテーブルに紙を敷き、ままごと用の木の丸椅子を逆さまに持ったさとこが、テーブルの上の物を打っている。よく見ると、ドングリの実を砕いている。横でみさとがドングリの皮を剥いている。あやかが「ドングリの実、入れる? 粉を集

▲ドングリの実を割って薬を作る

めていい？」と話しかけるが、さとこはそれに応じる余裕がないのか、黙ったまま打ち続けている。さくみがあやかの隣に座って、ドングリの実が小さく砕けていくのを眺めていた。ななこ、れみ、あすか、るりは少し離れた場所で小さな袋を作っていた。包装紙を切る人、筒状に折ってテープで仕上げる人、時々役割を替わりながら、出来栄えを見せ合い、賑やかにやっている。

ゴム鉄砲作り　一方、ゴム鉄砲作りは、ゆうすけが「昨日家でお母さんと作った」と、図のゴム鉄砲を持参したことから、たつま、たかゆきが「作りたい」「作ろう！」となって、私は造形コーナーに居続けることになってしまった。このゴム鉄砲は、図のように何本かの長さの異なる割り箸を組み、何か所も輪ゴムをかけて止めなければならず、大人の手を借りずには出来ないものである。このゴム鉄砲づくりは十月にも何度か出たが、自分で出来るようになるまで待つことになっていたのであるが……。結局は、子どもの「難しいけどやってみたい」という気持ちを、受け入れることにしたのである。



▲ゴムでっぽうの作り方

たかゆき、たつま、こうき、りょうへい、ゆうきが、何度もやり直しをしながらなんとか作り上げた。そして再び射的ごっこが始まった。

病院ごっこの方は、薬作りと薬袋が幾つも出来上がり、「看護婦さんの帽子が欲しい」「明日作ろう」と、降園を迎えた。子どもも保育者も忙しい一日であった。

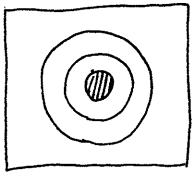
十一月二十九日（木）　晴

病院ごっこ　さとこが「看護婦さんの帽子を作らんといかん」と、今朝は薬作りから帽子作りになった。さとこ

の持参した帽子を見本に画用紙で作ることになり、あすか、れみ、るり、ななこたちは、ピンク、黄色、ブルーと色画用紙を切り、縁を折り込み、出来上がると帽子を頭につけて大満足！　帽子作りを提案したさとこはこの作業には参加せず、ままごとコーナーに入り、ドングリをせっせと砕き、薬作りに取り組んでいる。傍らであやかとみさとが皮を剥く。あやかが「私にもやらせて」と時々頼むがさとこに無視され、自分でも積み木を台に始める。思うようにドングリが砕けず、何度もさとこのそばへいき、やり方を見ては自分の場所に戻り、作業を繰り返す。そのうち、少し大きめではあるが、ドングリが一粒二粒と砕け始めた。よほど嬉しかったようで「せんせい、みて！」と私を呼びにきた。帽子組も、「あやかちゃんも薬作っとる」と新しく始まったあやかの作業をちょっと驚いたように見る。

ゴム鉄砲作り　たかゆきとたつまは、登園するなり、自分のゴム鉄砲を取り出し、輪ゴムの飛び具合を試したり、二人で飛距離を競い合っている。ゆうき、りょうへい、ゆうすけが登園して、ゴム鉄砲の飛ばしあいは賑やかさを増している。

ゆうきが「的を作らんといかん」と言い出し、広告紙の裏が白いのを探し、円を三重に描いて壁に張り、さらに点数表がいると、一番外側の円は10点、次の円は20点、真ん中は100点と、何度も書き直しながら書き入れたが、たつまは「射的は違うのがいい」と言い、「先生、どうやって作りゃいい？」と聞きにきた。「夜店なんかでやってるのかな？」「ロボットとかうさぎさん、車なんかを描いて立てればいいのかな？」と、よく分からないまま話していると、りょうへいが「これ」と人形を作って持ってきた。「人形はかわいそうよね…」と賛成しかねている私に、「おもちゃならいいら」と人形の的作りになってしまった。とにかく、ゴム鉄砲組は再び忙しくなり、出来上がった人形を



▲ゆうきが初めに描いた的

次々に積み木の上に並べ、思い思いに狙いを定めて輪ゴムを飛ばし始めた。

十一月三十日（金）　晴

病院ごっこ　昨日に引き続き、さとこの薬作りが始発となって病院ごっこが始まった。あやかも得意気に薬作りに参加している。ななこは、薬袋に朝顔やおしろい花の種を入れて「はい、これはお茶」と言ってあすか、みさと、れみ、私にも配ってくれた。「ごちそうさま、美味しいお茶ね」とお茶を飲んでいると、さとこが覗いて「お茶は後じゃなかった？」とななこに言う。「あっ、そうだった」とななこは配ったお椀を集めてままごとの棚へ片付ける。そこへるりが登園して看護婦帽を頭につけ仲間入りすると、これを見たあすか、れみ、みさとも看護婦帽を被り、ままごとコーナーの入り口に花ゴザを敷き、積み木で囲い、子ども用ベッドを運び込んだ。

いよいよ病院が始まるかな、と見ていると、れみの発案でシール作りが始まった。（紙に水性マジックで絵を描き、セロハンテープを上に貼り、絵を写し取る）「それは何？」といぶかしがる私に、「お注射の後であげる」と言う。四月、五月の遊びでは、シール作りが流行し、クジ屋さんの景品だったり、年少さんへのプレゼントだったりしたシールである。久し振りのシール作りで熱が入ったのか病院の方はなかなか開院とならない。私が「お腹が急に痛くなったので診て下さい」と行く。「もう少し待って下さい」とさとこの声。すかさずななこが「あすかちゃんたちが年中さんを呼びに行っちゃったよ」と言う。そんなやり取りの所へ、年中組の先生と一緒に「病院はここですか」と年中さんがやって来た。れみはそれを見て「はい、こちらです」と自分の所へ呼ぶ。小さい人達が列を作って並ぶ。ななこ、あすかたちは薬を袋に詰める。鉛筆の注射が終わった人に「ご褒美」と言っては薬の袋とシールを渡す。こうして病院ごっこは最終段階を迎えた。さとこは、薬作りから離れて、小さい人達が訪れてくれた様子をれみの後ろから眺めて嬉しそうであった。

ゴム鉄砲作り　一方、ゴム鉄砲作りは、今朝は早く登園したりょうへいとたかゆきが積み木で射的台を作り、昨日作った的を並べて射的を始めた。少し遅れて登園したたつまが登園活動を終えると射的台へやってきて、「どいて」とりょうへいを押し退けて射的を始めた。りょうへいは何も言わずに横に出てしまう。そこへたつや、ゆうすけが登園し、射的の様子を見るなり「やらせて」と入って、射的台の前には完全にりょうへいの場はなくなってしまった。その状況を見ていた私は、思わず、「この台はりょうへい君とたかゆき君が作ったのよ。お友達の作った場を押し退けて占領するのは良くないよ。たつま君たちも皆でやるにはどうしたらいいか考えようよ」と、射的台をひろげることを提案した。たつまは「そんなことは知らなんだ」とちょっとおどけながら、ゆうすけ、たつやとりょうへいが入れる場を作り出した。射的台を作った一人がりょうへいと分かり、りょうへいの立場は皆の認める所となった。

射的台の前に、横一線上にたつま、たかゆき、ゆうすけ、たつや、りょうへいの五人が並び、互いに、的に当たった、的の人形が倒れた、なかなか当たらない等おしゃべりをしながら、楽しい賑わいが続いた。そのうち、たつまが撃つ場所と積み木の射的台までの

▲びょういんごっこ

距離を何通りかに設定して競争しようと言い出し、青いビニールテープを床に貼って作ることになった。「おれがやるワ」とりょうへいがこの役を引き受け、自分の手幅で測っては、三通りの線を作った。この頃にはゆうき、ゆうた、こうきも仲間入りして、一段と賑わいを増していった。りょうへいはビニールテープの端をたかゆきに押さえて貰いながら線を貼り終えると、射的には加わらず、友達の競い合う様子を面白そうに眺めていた。

二つの遊びから保育者が見たもの

病院ごっこ　さとこは、日常の遊びでは描いたり作ったりを好み、紙で手提げポーチやお花、シール等を作ってくじやさんの景品にしたり、地図や迷路を描いてキャンプごっこに使ったりと、遊びを進めていく。友達からの人気もあり、「さとこちゃん仲間に入れて」「さとこちゃん○○ごっこしよう」と誘われることも日常的にあり、本人はその都度「いいよ」と応じて楽しむ姿がある。しかし基本的には仲良しのさくみ、るりたちと二人、三人で行動することが多く、五人、六人という大勢の仲間で音楽会をしよう、お店を開こう、となると、準備段階では楽しいが、いよいよ開店となると見る側に、つまり外側に回ってしまう姿がある。九月、『三びきのやぎのがらがらどん』のペープサートをしようとさとこが始めた時も、ペープサートに強い興味を持って仲間入りしてきたゆうき、りょうた、ゆうすけたちの勢いに飲み込まれ、準備は一緒にしたものの、「演ずる」段階では観る側に回ってしまった。

以来、私はそんなさとこの姿が気になっており、今回の「病院ごっこがやりたい」ではさとこの思いをなんとか実現させたいと思った。どう実現させていくかでは、実際にさとこが始発の段階で「どうやればいい？」と尋ねた時、「病院ごっこには何があればいいかな？」とさとこが問題としたことをさとこに返し、さとことその仲間にそれを任せて、私は材料調達係に回った。それは私のどこかで、子どもたちの遊びに、病院らしさとして、一つの型を求めそうな自分を警戒してのことでもあり、

▲的が並んだ射的台

さとこと子どもたちの「病院ごっこ」をより自由に楽しんでほしいと願ったからである。二十七日（火）～三十日（金）の経過では、子どもたちは思い付くまま準備を進め、その場面場面では真剣に取り組み、自分達の発案と出来栄えに満足した姿で年中さんを迎え、賑わい、面白かった、嬉しかった。さとこは、二十九日（木）の帽子作りには、参加せず外側から傍観する姿も見られたが、全体の流れの中では最後まで中心的な役割を持ちながらやり終えた。このことは、以前の遊びからは一つの成長が見られ、私にとっても嬉しいことであった。ただ、「ごっこ」という遊びに対して、もっと適切な指導があったのではないか。例えばさとこと一緒に何が必要かを考える、どのように備え、どう運ぶか保育者も一緒に作り上げていく、等々の思いが残った。

ゴム鉄砲作り　「ゴム鉄砲作り」は、二学期に入って男の子の間でゴム鉄砲を作る、より工夫して格好のよいものを作って輪ゴムで飛ばす、が遊びの中で出たり消えたりしながら楽しまれている。今回の遊びでは、ゴム鉄砲作りや、迷路ゲーム作り、コマ作り等、作る活動での、りょうへいの着目の面白さ、自分の思いに近付けようと

何度も工夫する姿など、他の子どもたちにも一つの刺激となることがしばしばあったのに、回りの友達との関係性がなかなか強まっていかない、コミュニケーションがうまく取れていないように思われた。そこで、りょうへいに視点を当てることで、りょうへいへの理解を進めたいと考えた。

この遊びで、りょうへいは射的台をたかゆきと積木で組む、的の人形を並べる（場面①）、自分で何度か撃ってみる、たかゆきと二人で的に輪ゴムの当たる回数を数えたりして楽しい場面（場面②）、何人かの友達が登園して撃つ人が増え、「どいて」と自分の場所を追い出されると黙って出る場面（場面③）、再び仲間入りして並んで楽しそうに撃つ場面（場面④）、さらに、撃つ距離に変化をつけて線を作ろう、となったとき、それまで会話らしきものがなかったのに「おれがやるワ」とテープ貼りをかってでた場面（場面⑤）、と大まかに分けられるが、この中で、りょうへいの三つの側面が見えたように思う。場面①と②では友達と一緒にやることが楽しい姿があり、場面③ではなにも言えずに自分の場を押し出されてしまう、コミュニケーションがうまく取れない姿が見られる。場面⑤では、たかゆきに手伝って貰いながらではあるが、一人で間隔を取りながらビニールテープを貼り、一本ずつ確かめながら線を引いていくことがいかにも楽しい姿があった。

このことから見ると、りょうへいの気持ちの中に一人の世界が楽しい、でも友達ともやりたいという気持ちがあり、その間で揺れているのではないか、と思われる。一方で友達とかかわりたい気持ちはあるが、コミュニケーションの取り方がよく分からない、その為にトラブルになりそうになると引いてしまうのではないか。以上から、今後の課題として、まずコミュニケーションが出来やすい環境、場を用意してりょうへいを巻き込んでいく、そして友達と一緒にやるのは本当に面白い！　とりょうへいが感じられる場を一つずつ増やしていくことではないかと思った。

（愛知双葉幼稚園）